

# 哲学カフェ：成功は努力か運か

マイケル・サンデルの著作を通して考える

荏谷 千尋

金沢大学 高大接続コア・センター

kariyach@staff.kanazawa-u.ac.jp

Sun, 4, Aug, 2024

## Keywords:

- メリトクラシー（功績主義；能力主義）；自己責任；偶然；運命（親ガチャ）；正しさを議論する；価値相対主義

## 0. 論点

### 1. 「頑張れば報われる」

- 本当か？（事実認識）
- 正しいか？（規範）
- 「頑張らない」「頑張れない」は自己責任？（規範）

### 2. 「親ガチャ」

ネット俗語で「親を自分で選べないこと」。出生に当たり、運しだいのガチャ（ソーシャルゲームやカプセル玩具自販機）を1回しか回せない状況をいう。「現代用語の基礎知識2022」（自由国民社）で、「親ガチャ」はこう説明されている。昨年あたりからSNSを中心に急速に広がり、流行語にもなった（読売新聞（2022））。

### 3. 「みんな違ってみんないい」<sup>1</sup>

- 正しいか？（規範）
- ➡ 「価値相対主義」の危険性
- ➡ みんなに共通する規範（正しさ）を問う力の衰退
- Cf. プラトン：アテナイの衰退の原因を、政治と正しさの分離にみる
  - 背景：「正しさ」を問うことを冷笑する時代
- Cf. アリストテレス：アテナイの復興期に、正しさについて論じる枠組みを提唱
  - 分配的正義論<sup>2</sup>
- e.g. 環境省職員の長崎県水俣病患者への対応（マイクオフ問題）（朝日新聞（2024））
- e.g. やまゆり園事件（朝日新聞（2020）；朝日新聞（2022））

## 1. 自己紹介

### 1. 研究

#### 政治思想史：18世紀後期ブリテン思想

- エドモンド・バーク（庶民院議員）を中心に

#### 1. 18世紀後期ブリテンにおけるキケロ、タキトゥスの受容

- 議会におけるレトリック

## 2. フランス革命期ブリテンにおける国際法解釈

- 国家・帝国・植民地

## 2. 校務：高大接続

### リーディングセミナー

- 高校生向けに書かれた新書らを読みあう
  - 最近の高校生は本を読まない？
  - 高校生向けの良書の出版（読まれてない）
- セミナーの模様 (<https://www.kanazawa-u.ac.jp/news/122670>)

## II. 世界価値観調査（補足資料参照）

- 人生は自分の思い通りになる／ならない
- 収入はもっと平等にすべき／個々人の努力を刺激するようもっと収入の開きを大きくすべき
- 長い目で見れば、勤勉に働けば生活がよくなり成功する／勤勉に働いても成功するとは限らない。成功は運やコネ次第
- 政府は豊かな人に課税し、貧しい人に補助金を支給することは民主主義にとって必須ではない／必須である

## III. サンドル『実力も運のうち』

### 1. ポイント

1. 能力（功績）主義の欺瞞性の暴露
2. トランプ現象の分析：ポピュリズムや反知性主義に求めない（民主党政権の失敗）
3. 諸悪の根源としての大学（入試制度）＝人間の「選別装置」

道徳的な観点からすると、才能ある人びとが、市場主導型の社会が成功者に惜しみなくえてくれる巨額の報酬を受けるに値する理由は、はっきりしない。能力主義の倫理を支える論拠の中心には、自分で制御できない要素に基づいて報酬を受ける、あるいはお預けにされるのはおかしいという考え方がある。だが、ある才能を持っていること（あるいは本当にわれわれ自身の手柄（あるいは落ち度）だろうか。そうでないとすれば、次の点を理解するのは難しい。自分の才能のおかげで成功を収める人びとが、同じように努力していながら、市場がたまたま高く評価してくれる才能に恵まれていない人びとよりも多くの報酬を受けるに値するのはなぜだろうか？能力主義の理想を称賛し、自らの政治的プロジェクトの中心に置く人びとは、こうした道徳的問題を見過ごしている。彼らはまた、政治的により重要な部分を無視してもいる。勝者のあいだでも敗者のあいだでも、能力主義の倫理が促進する道徳的に魅力のない姿勢のことだ。能力主義の倫理は、勝者のあいだにはおごりを、敗者のあいだには屈辱と怒りを生み出す（サンドル、マイケル・鬼澤忍（訳）（2021）：49-50頁）。

### 2. 方法的特徴

1. 政治家の演説の分析

オバマは自分の医療改革プランの利点を論じる際、変化を付けながらもこの言い回しを60回以上使った（195頁）

2. 社会意識調査の活用

## 2. アメリカ社会の変容：能力（功績）主義の暴力

1. 学歴による社会の分断

- 大学卒（学士）は国民の1/3
- 大学卒が非大学卒を見下す社会に
- 民主党の変容：労働者を基盤とする政党から大学卒（エリート）を基盤とする政党へ<sup>3</sup>

- 「正しさ」ではなく「賢さ」を訴える<sup>4</sup>

- ➡ 非大卒者の声の受け皿の不在

## 2. 裏側のメッセージとしての自己責任

- 同じ機会がありながら、能力（功績）なき者は努力不足
- ➡ その結果は自分一人が負うべき（自分を責める以外の方法なし）
- ➡ 政治は介在、介入しない（すべきではない）

## 3. 貴族社会 vs 能力主義社会

### • 貴族社会

- 世襲による身分や権限、資産の継承
- 不平等な社会
- 貴族：自分の境遇が幸運に過ぎず、優れた者が他にいることを知る
- 貴族以外：自分の境遇は自分の責任ではないことを知る
  - 他人と連帯しやすい

### • 能力主義社会

- 個々人の努力と才能により、境遇の改善が可能
- 成功は努力次第という意味で公平な社会（結果の平等を求めない）
- 成功者：自分自身の努力と能力によって、自らの地位を手に入れたという自己満足にふける
- 敗者：自分が努力しなかったせいだと自分を責める
  - 他人と連帯しにくい

## 4. 3つの公共哲学：サンデルの処方せん

### 1. 自由市場リベラリズム

- ハイエク：功績と経済的報酬を区別
  - 功績：道徳的価値を含む業績
  - 経済的報酬：市場の需給関係によって決定

### 2. 福祉国家リベラリズム

- ロールズ：功績につながる前提条件は偶然に依拠
  - 努力できる能力も、自らが獲得したものではなく、環境に依存
  - ➡ 国家による結果の不平等の是正（所得の再分配）を主張
  - Cf. MONOPOLY OF INEQUALITIES（不平等なモノポリーゲーム）

### 3. 公共善の哲学：アリストテレス主義

- サンデル：ハイエクとロールズの問題点を指摘
- どちらも能力主義と決別していない
- 勝者のおごり、敗者の屈辱問題を解決しない
- 恵まれない者を犠牲者として救済することは、尊厳を傷つける
- サンデルの処方せん
  1. 貢献的正義の原則を最優先する<sup>5</sup>
    - 労働の尊厳の回復（消費者ではなく、生産者として共通善に貢献し、他者から承認を得る）
  2. 能力主義を生み出す根源の特定とその排除：大学入試
    - 親の世帯所得に応じて、大学入試への準備が可能に

- 難関大学合格者も、入学後、燃え尽きている／終わりのなき競争環境（意識）
- ➡ 大学入試に偶然性を混ぜる<sup>6</sup>
- ➡ 大学を特権化しない（大学に進学しない者の社会的価値を認める）

#### IV. 日本の場合

##### 1. 東京大学

- 追跡調査（本田由紀（2023））
  - 卒業生の社会観：男女差あり（男性が支持する傾向にあり）
    - 「社会に出てからは人と競争していくのが当然だ」 / 「生活に苦しんでいる人は、努力が足りないせいだ」
- 学生を支える者の世帯収入：
  - 950万円以上が53.7%を占める（東京大学学生委員会（2022））

##### 2. 荻谷剛彦（教育社会学）：学習資本論<sup>7, 8</sup>

- 学歴社会から学習資本主義社会へ
  - 学習資本＝「自ら学ぶ力／学び続ける力」
  - 学び続ける力がない者は生き残れない
  - 経済界の要請に応える
- 見落とされる学習資本の影：
  - 学力格差/学習意欲格差/学習態度格差

##### 3. 本田由紀（教育社会学）：メリトクラシーと能力主義の混同

- イギリスのメリトクラシー：個人の業績（achievement; merit）のみ
  - 家族的背景、生得的性質を排除して抽出
- 日本の能力主義：
  - 家族的背景、生得的性質、個人の業績など、あらゆるものを包摂（個人の業績を取り出せない）
  - うまくいった事柄を後付けで「能力」と呼ぶ
  - メリトクラシーを能力主義と翻訳（本田由紀（2020）: 46-47頁）

#### V. ワークショップ（感想戦）

1. 自己紹介
2. 公開講座に参加した理由
3. **もっとも重要だと思った点とその理由**
4. 「頑張れば報われる」という言葉への印象
5. 日本の「親ガチャ」問題

#### VI. KUGS高大接続プログラム

- 高校生向け案内

## 参考文献

- Paul Gombert (2016) 「Why distributive justice is impossible but contributive justice would work」. 『Science & Society』, Vol.80, No.1, pp.31-55. Available at: <http://dx.doi.org/10.1521/siso.2016.80.1.31>.
- アリストテレス・神崎繁・相澤康隆・瀬口昌久 (訳) (2018) 『新版 アリストテレス全集 17: 政治学・家政論』, 岩波書店.
- サンデル, マイケル・鬼澤忍 (訳) (2021) 『実力も運のうち: 能力主義は正義か?』, 早川書房.
- ミュラー, ジェリー・Z・松本裕 (訳) (2019) 『測りすぎ: なぜパフォーマンス評価は失敗するのか?』, みすず書房.
- 寺地幹人 (2009) 「日本社会における「努力」と「運」の関係・序」. 『World Value Survey (世界価値観調査) を用いた実証研究: 労働・幸福・リスク (SSJ Data Archive Research Paper Series No.40)』, pp.73-82.
- 山口裕之 (2022) 『「みんな違ってみんないい」のか?: 相対主義と普遍主義の問題』, 筑摩書房.
- 朝日新聞 (2024) 「「時間です」水俣病患者側の発言遮りマイク切る 環境相と懇談で国側」. 『朝日新聞』, Vol.2024年5月3日.
- 朝日新聞 (2022) 「「自分依存」が能力主義に: 熊谷晋一郎さんが考えるやまゆり園事件」. 『朝日新聞』, Vol.7月26日.
- 朝日新聞 (2020) 「障害者標的、根深い差別意識 被告「役に立ちたかった」 やまゆり園事件 8 日初公判」. 『朝日新聞』, Vol.1月6日.
- 本田由紀 (2020) 『教育は何を評価してきたのか』, 岩波書店.
- 本田由紀 (2023) 「「東大卒」を解剖する: メリトクラシーとジェンダーギャップの錯綜」. 『世界』, No.971, pp.52-62. Available at: <https://cir.nii.ac.jp/crid/1520859392517113216>.
- 東京大学学生委員会 (2022) 「2021年度 (第71回) 学生生活実態調査結果報告書」. Available at: <https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/students/edu-data/h05.html>.
- 荻谷剛彦 (2012) 『学力と階層』, 朝日新聞出版.
- 読売新聞 (2022) 「「親ガチャ」は「優しい言葉」か…1万8232ツイートを分析して見えた「ネットの気分」」. 『読売新聞』, Vol.5月15日.

1. 「はじめに」の最初に書きましたが、「正しさは人それぞれ」と並んで最近よく聞く言葉に、「絶対に正しいことなんてない」とか「何が正しいかなんて誰にも決められない」などというのがあります。これらの言葉を言う人たちは、どうやら「ちょっと気の利いた、よいことを言っていると思っているようなのですが、私はこうした言葉を聞くたびに背筋が寒くなります。こうした言葉は、より正しいことを求めていく努力をはじめから放棄する態度を示しているように思われるからです。そして、こうした言葉を吐く人たちは、たとえば私が何も悪いことをしていないのにガス室に送られそうなどとき、決して助けてくれないだろうと思うからです。どんなに話し合っても、国民全員が、さらには人類全員が合意することはないかもしれません。たといいま生きている人たち全員が合意したとしても、まだ生まれていない人は合意していません。その意味では、「絶対正しいことなんてない」のかもしれませんが、しかし、**「より正しい正しさ」はあります**。一方的に決めたルールを暴力によって強制するよりは、話し合ってお互いに納得して決めていく方が正しいですし、これまで正しいと思われていたことに対して、その不正を告発する人たちの声が聞き入れられ、改正されたときには、より正しいものになっているでしょう。そうやって、たとえば女性の権利が認められてきたわけです (山口裕之 (2022): 140-141)。
2. たとえば、笛吹きが技術の点でみな同様であるならば、そのなかに生まれのよさの点でまきっている笛吹きたちがいるとしても、その者たちにより多く笛を手にするのを認めるべきではない。なぜなら、生まれがよいからといって、その分上手に笛を吹くわけではないからである。むしろ、すぐれた演奏をする者たちにこそ、道具もすぐれたものを与えるべきなのである (アリストテレス・神崎繁・相澤康隆・瀬口昌久 (訳) (2018))。
3. アメリカの連邦議会やヨーロッパ諸国の国会における政治論議の危うい状況を一瞥しただけでも、疑念が浮かぶはずだ。優れた統治のために必要なのは、実践知と市民的美徳、つまり共通善について熟考し、それを効率よく推進する能力である。ところが、現代のほとんどの大学では——最高の評価を受けている大学でさえ——これらのいずれの能力も十分に養成されているとはいえない。しかも、最近の歴史的経験から次のことがわかる。洞察力や道徳的人格を含む政治的判断能力と、標準テストで高得点をとり、名門大学に合格する能力とは、ほとんど関係がないのだ。「最も優秀な人材」は、学歴で劣る同胞よりも優れた統治ができるという考え方は、能力主義的なおごりが生んだ神話なのである (サンデル, マイケル・鬼澤忍 (訳) (2021): 182頁)。
4. 評価のための対比として、「賢い vs 愚か」は、「正義 vs 不正義」や「正しい vs 間違い」といった倫理的あるいはイデオロギー的な対比に取って代わるようになった。クリントンもオバマも、彼らの有望な政策は「行なうのが正しいだけでなく、行なうのが賢明な政策」だとししばしば主張した。こうしたレトリックをチェックしてわかるのは、能力主義の時代では正しいことよりも賢明なことのほうが説得力を持っているということだ (サンデル, マイケル・鬼澤忍 (訳) (2021): 171頁)。
5. 「労働」という言葉は、私たちがお互いに価値を見いだす多種多様な人間的な活動を含むように、十分に広い意味で理解されなければならない。また「知性」という言葉は、音楽、芸術、工芸、社会的技能、その他多くの重要な複合的な能力の発揮を十分に含むように、広く理解されなければならない。これらの能力を発展させ、自分と他者の利益になるように発揮させることを通して、私たちは自分の社会的な貢献を根拠にして、私たち自身を高く評価するようになる。そして、同じく他者も、

同じ理由で私たちを高く評価するようになる。〔原文改行〕重要な善とは、すなわち、能力を開発すること、開発した能力を人間の善に貢献する労働で発揮すること、そして、その貢献に見合った敬意を得ることである。〔略〕この観点からすると、正義の理論の課題は、これらの重要な善を誰もが利用可能にするための社会的な規範を明示することである。これが貢献的正義の規範である（Paul Gombert (2016): p.44）。

6. だが能力主義的信念は、勝ち誇っているときでさえ、それが約束しているはずの自制をしない。連帯の基盤も提供しない。敗者には容赦せず、勝者には抑圧的に振る舞い、能力は専制君主となる。そうなったとき、われわれにできるのは、その古くからのライバルの力を借りて専制君主の暴走を止めてもらうことだ。それこそ、くじ引き入試が人生のさきやかな一領域で試みようとするものである。偶然に任せることで、能力のおごりをくじこうというのだ。〔中略〕こうした状態〔サンドル自身、中学生、高校生のときに、成績の順位が校内で可視化され、競争心に追われて疲労し、知的好奇心を失いそうになっていた〕を憂えたのが、10年生のときの生物の教師だったファーマン先生だ。皮肉屋でいつも蝶ネクタイを締めていた先生の教室は、ヘビ、サンショウウオ、魚、ネズミなどなど、興味深い野生動物でいっぱいだった。ある日、ファーマン先生は抜き打ちテストを行なった。私たちに紙を一枚取り出させ、1から15まで番号を書かせて、マルかバツかで答えなさいと言う。まだ問題を出してもらっていませんと生徒が抗議すると、先生は、一つひとつ自分で問題文を考え、それが正しいか間違っているかを書くようにと命じた。生徒たちが不安げに、このでまかせ小テストも点数がつき、成績に反映されるのですかとたずねると、先生は「そうさ、もちろんだ」と答えたものだ。そのときは、いっふう変わっているが愉快的、教室での冗談だと思った。だが、いま振り返ってみると、ファーマン先生は先生なりのやり方で、能力の専制にあらがおうとしていたのだとわかる。生徒たちを選別と競争から引き離し、サンショウウオに目を見張るだけの余裕を与えてやろうとしたのだ（サンドル、マイケル・鬼澤忍（訳）（2021）: 344-347頁）。
7. 個人の学習能力には明確な差異がある。しかもその差異は、子どもが生まれ育つ家庭の環境や階層と密接に結びついている。「自ら学ぶ」力の測定は難しいが、学ぼうとする意欲や、自分から調べようとする学習態度などの面では、明らかに階層差が存在する。〔略〕同じように学習資源が与えられても、それをどのように活用し、「自ら学ぶ」ことにつなげていくかという「学ぶ力」の差があれば、学習者の主体性にまかせるばかりの学習論は、格差も個性と見なす安易な個性主義と同じになる（荻谷剛彦（2012）: 268頁）。
8. 「詰め込み教育」批判やゆとり教育を駆動していた基本的な教育観は、「誰でもがんばれば学習目標を達成できる」という「努力の平等」論であった。学習成果に差が出るのは、「がんばりが足りなかった」からであり、「がんばる」か「がんばらない」かは一次的に本人の自己決定に委ねられている。学習機会はすべての子どもの前に平等に開かれている。学力や体力には個体差があるが、「努力する能力」は万人に均等に分配されている。というのが、近代日本において、一度として懷疑されたことのなかった「努力主義」イデオロギーである（荻谷剛彦（2012）: 解説（内田樹） 336-367頁）。